

Ouroboros

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

Jul. 25, 2024

東京大学総合研究博物館ニュース

The University Museum, The University of Tokyo



本館特別展示「都市－アーケオロジー」の場景（フォワードストローク撮影）。

本館特別展示

「都市－アーケオロジー」における展示実験

米田 穰

背景

特別展示「都市－アーケオロジー」は、2024年5月31日から8月30日の期間に総合研究博物館本館の企画展示室において開催した研究展示である。この展示は、2020年度から2024年度に実施された科学研究費補助金学術変革領域研究（A）「中国文明起源解明の新・考古学イニシアティブ」のアウトリーチ活動として、領域代表者の中村慎一・金沢大学副学長を監修に迎え、本館と共催となっている。この研究プロジェクトでは、新石器時代末から青銅器時代初頭に黄河中流に発生した二里头文化を「中国文明」の誕生と位置づけ、周辺地域との相互作用のなかで文明誕生のメカニズムを解明することを目的としていた。新型コロナウイルス感染症の影響で現地調査が大きく制限されたが、先行した科学研究費補助金・新学術領域創成研究「稲作と中国文明－総合稲作文明学の新構築」（2015～2019年度）で採取した長江下流域の新石器時代人骨や動物遺存体、考古遺物に新たな分析を加え、黄河流域で報告されている中国語文献データとの網羅的な比較検討を実施して、二里头文化に先行して「都市」や「国家」が形成された良渚遺跡群（浙江省杭州市）の論考を深めることができた。本展示では、監修者の中村が継続する玉製祭祀具の型式学的編年研究や、2007年の圉壁発見によって急速に進展した良渚遺跡群の発掘調査成果を浙江省文物考古研究所から提供された写真や図版を用いて紹介した。さらに2つの大型研究プロジェクトで実施した考古学と自然科学の協働、具体的には古病理学や人骨の同位体分析、炭化米の古代ゲノム研究などの成果をあわせて紹介するこ

とで、良渚遺跡群の特殊性を都市の誕生という文脈で紹介した。それによって、自らが暮らしているが普段考えることの少ない「都市」という居住空間の特殊機能に観覧者が自ら気づき、我々研究者がデータや物的証拠を組み合わせる新たな仮説を構築する、考古学研究の営みそのものを体感できる内容とした。

企画の立案

この展示企画には2つの大きな障壁が存在した。研究と展示に関する協定を締結した浙江省文物考古研究所との交渉で、重要文化財である良渚遺跡群の出土遺物の貸し出しが困難であること、人骨資料についてはレプリカであっても展示が許可されない可能性が高いことがわかった。そのため、考古遺物については3Dプリンタで作成したレプリカを、人骨資料は様々な角度から撮影した多数の写真をコンピューター内で立体造形するフォトグラメトリを用いて作成した3D画像をモニタに掲示することにした。

博物館における「レプリカ」の活用については、その効用と問題点について議論がある。例えば小島（1993）は、博物館でレプリカの利用について、①長期的な展示が可能であること、②原品を占有する必要がないこと、③体系的な展示を行えること、④復元した状態の製品を展示できること、というメリットともに、(i) 原品を持つ情報の一部の一部を写したものにすぎない、(ii) 情報の転写が完全でない、(iii)（原品としての）美的鑑賞の対象とならない、という問題点を指摘している。本館の展示でも、オリジナル資料が持つ情報と「アウラ」（芸術作品が有する時間と空間に結びついた一

回性に由来する権威。オーラ：ベンヤミン 1997）を観覧者が体感することで、研究現場で自然物や人工物に向き合う研究者の驚きや感動を追体験させる試みが行われてきた。例えば2012年開催の特別展示「生きる形」にあたって、企画者の遠藤秀紀は「生きていた命のあかしを、存在をもって語るの、形のみだ」と宣言している。

本企画では、そのような原資料のもつ力を活用できない条件のもとで、いかに研究者が研究で経験した苦悩と驚き、そして喜びを伝えることができるか、レプリカ資料の空間配置と解説文のデザインを通じて試みた。参考にした過去の展示が2つある。ひとつは、2005年に開催された開館10周年記念特別展示「アフリカの骨、縄文の骨」である。この展示では、化石人類を研究する諏訪 元特別教授と、展示デザインを担当する洪 恒夫客員教授が対話を通じて、「研究の成果を展示する」のではなく、「通常実践している研究そのものを展示としてみせる」ことを試みている。もうひとつが、2010年に開催された「火星－ウソカラデタマコト」である。火星表面をなぜ、どのように探査するのか、探査計画に関する複数の素案を並立して展示することで、研究者の熱い思いを伝える試みがなされた。芸術的ともいえる高解像度の火星表面写真とローバー試作機という目玉展示物もあったが、探査計画のアイデアそのものが主要コンテンツであり、研究内容を文字と展示物で伝える試みと位置付けた。

これらの展示の企画意図と具現化の過程を洪から示してもらい、本企画に応用できる考え方や手法を模索した。その過

程で、文字情報で観覧者の関心を喚起すること、観覧者は情報を組み合わせて自ら新しいアイデアを発見する「研究体験」を提供すること、を主なテーマとした。対話を通じて、研究において最も主要なコミュニケーション方法である「論文」は、文字を通じて研究を伝達する優れたメディアであるが研究者以外にはなじみがないので、「論文を立体化・展示化」することで観覧者に「研究体験」を提供する、という展示コンセプトに到達した。

展示の構成

本展示では、5,300年前から4,500年前に長江下流に栄えた良渚遺跡群において、単なる巨大な村落ではない「都市」という特殊機能を有する居住空間の成立を議論した論考（米田 2024）をもとに構成した。鍵となる遺物・遺構や先行研究を、図版を引用するのと同様に展示物を引用することで、展示空間を周回し、展示物を見ることが、論文のなかに入り込む体験になることを意図した。本展示の構成は、要旨、序論、資料と方法、本論、考察という学术论文の構成に準拠した（図1）。入口の挨拶で、本展示が研究を展示するために論文を立体化・展示化した実験であること、研究活動における最終生産物である論文の位置づけを説明した。続いて、要旨に相当する「本展示の趣旨」を、展示空間が一望できる位置に地図とともに示すことで全体構成と

観覧の順路を示した。企画展示室入口から正面に臨む位置に展示タイトルとアイキャッチ（神人獣面紋のイラスト）を配した「資料と方法」のパネルを配置して、展示のスタート地点を明示したが、展示開始後に時計回りに観覧する方が散見されたため、入口からの導線を示す矢印のステッカーを床面に追加した。

本文にあたる展示物に先立ち、序論としてヒトの頭蓋骨を加工した頭骨杯の3Dモデルを提示して、「人骨が加工されたのは、ここが都市だったからか？」という問題を提起した。続いて、本論に相当する10個の資料を展示した（図1参照）。それぞれ考古学的発見として興味深い、良渚遺跡群に広範囲から人・物・情報が引き寄せられていた証拠、地縁・血縁のない他者が共存するための特殊な装置として宗教や整理権力が機能していたことを紹介した。さらに、考察として東アジアで最古の脊椎カリエス症例を示して、異邦人と共存する都市の負の側面を示して、都市の考古学が現代につながるテーマであることを示した。また本館が所蔵する西アジアの遺跡出土物と比較して、異なる時空間に誕生した古代都市の共通性を示すことで、人類史における都市の本質的な意義の考察を促した。

観覧者の反応

本展示を観覧した感想をインターネットのアンケートフォーム（5点満点）に

て収集した。7月22日時点では36件と回答数は少ないため、本展示に対して強い印象を受けた観覧者に回答が偏っている可能性があるが、展示の見やすさ（4.1）、わかりやすさ（3.7）、面白さ（4.4）、展示物の効果（4.2）と高い評価を得た。自由記述では以下の様なコメントが寄せられ、企画意図はある程度達成されていると思われる。アンケート集計については、展示終了後に新たに分析に供する予定である。

（アンケートの自由記載欄より）

・西アジアと比較した東アジアの都市の考察の論文の形式で進む展示内容が珍しく、理解しやすかった。都市の考古学という考えたことのなかった分野で、装飾や食べていたものも手がかりに研究が展開されていて興味深かった。

・研究課題に対するアプローチのベクトルをいくつも教えてくれて、ひらめきや気づきの面白さを教えてくれる良い展示だった。個人的には文物を並べるだけの展示よりこのような見学者に考えさせる展示が好き。

謝辞

本展示の企画コンセプトは洪 恒夫客員教授との共同研究の成果である。実際の論文の展示化・空間化は杉谷 進氏・上野香代氏（有限会社図考館）のデザインによって実現した。

引用文献

- ヴァルター・ベンヤミン（佐々木基一編），1999. 複製技術時代の芸術. 192 pp. 晶文社，東京。
- 小島道裕，1993. 博物館とレプリカ資料. 国立歴史民俗博物館研究報告，50: 443-460.
- 米田 穰，2024. 良渚遺跡群における『都市性』の議論. 中村慎一監修，米田 穰・佐々木由香・張隆隆史編. 東アジア考古学の新展開: 39-48. 雄山閣，東京。

（本館教授／年代学、先史人類学）

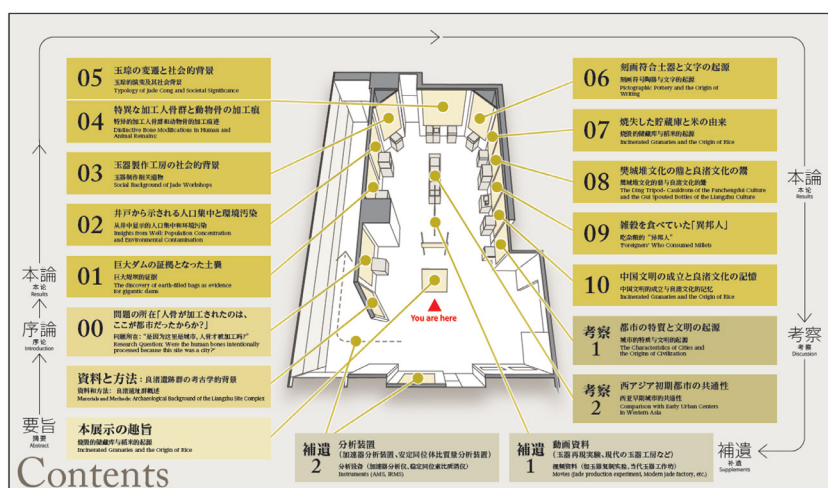


図1 展示構成と順路を示した吊りパネル。

大地とまちのタイムライン特別展示

戦国時代の楡葉と猪狩氏

白石 愛

楡葉町内に点在する城館跡

15世紀半ば以降16世紀末までの約1世紀にわたり、全国各地で紛争が常態化していた時代を戦国時代とよぶ。一般的には戦国大名が群雄割拠していた様子が想起されるが、現在の東北地方にあたる奥羽（陸奥国と出羽国）は、土地が広大なため、全域を支配する強大な戦国大名はおらず、中小の領主が各地に存在していた。

楡葉郡（現在の福島県双葉郡広野町・楡葉町・富岡町・川内村およびいわき市北部（旧久之浜村・大久村・川前村）にあたる地域）は岩城氏領の北端に位置し、相馬氏領に接していたため、岩城・相馬両氏の領地の争奪戦に巻き込まれていた。激しい争いの地であったことを物語るように、現在の楡葉町内には9つもの城館跡が残っている。楡葉城が最も中心的な城であったと考えられるが、他の城

は全て楡葉城より北側に位置しており、相馬氏や伊達氏を強く意識した立地に築かれている。

城館の多くは自然の地形を活かして築かれたという特徴がある。小高い丘陵や台地の先端部や、河川に接する地域に分布している。河川は自然の堀でもあり、水運にも使われた。楡葉町の中心部を横断する木戸川沿いには天神山城・大谷館、木戸川の支流沿いに楡葉城（山田川）、小塙城・上ノ原城（入海川）、小山城（木戸川・金鋼川）、名合沢館（名合沢川）、井出川沿いに井出城、才連川沿いに蓑輪城があった。天神山城・蓑輪城は岬の先端に築城されており、海も利用していた。戦国時代という、戦争による破壊のイメージが強いが、自然環境との調和をはかりながら、城館が建築されていた。

楡葉城・小塙城などの発掘調査によれば、以前から暮らしを営んでいた場所に

改築を加えて築城していたことが判明している。何れも複数の曲輪からなっている。曲輪と曲輪の間が土塁で区切られており、土塁を盛ったうえで空堀を掘ることによって、より高低差を出し、隣の曲輪を見えにくくすることで曲輪間の防備を強化しているのがこの時代の特徴である。自然の高低差を利用したうえで、高度な築城技術も用いられていた。楡葉城跡からは16世紀の遺物が多く出土しており、船載陶磁片（図1）や鉄滓とともに鉄砲玉も出土している。小塙城跡からも製鉄炉があったことが確認されている。

楡葉をめぐる攻防

当該時期に楡葉郡を治めていたのは岩城氏家臣の猪狩氏である。猪狩氏の出自の詳細はわかっていないが、南北朝動乱期に小楡葉（広野町）周辺に基盤を築き、その後、岩城氏と結んで北楡葉に勢力を



図1 船載青花陶磁器（16世紀明朝／楡葉町歴史資料館所蔵）。

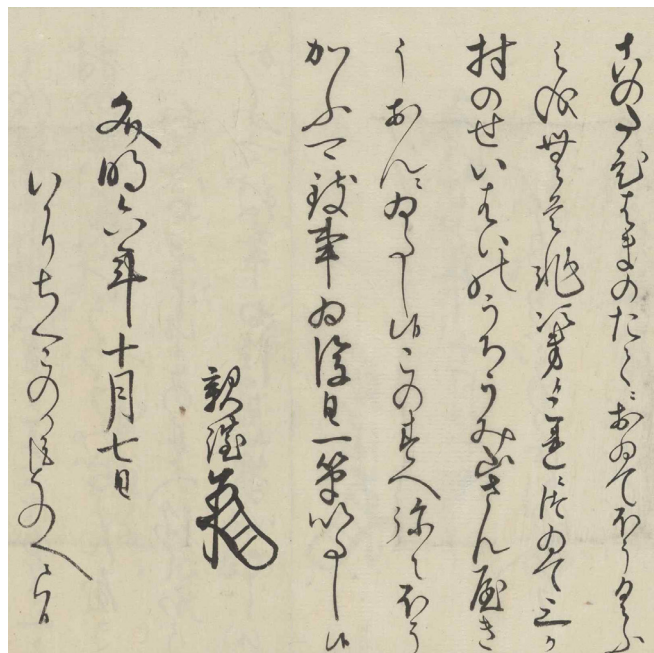


図2 岩城親隆領知判物（写本、会津若松市立会津図書館所蔵『新編会津風土記』巻六）。写真提供：会津若松市。

拡大したと推定されている。猪狩氏の具体的な動向がわかるのは15世紀後半からで、『新編会津風土記』（江戸時代に編纂された『会津風土記』の補遺、享和3（1803）年-文化6（1809）年編纂）に写された古文書に登場する。文明6（1474）年に岩城氏が楢葉氏を滅ぼした際、その功績により重臣猪狩氏が楢葉郡の領地を与えられた（図2）。岩城氏にとっても、楢葉郡を獲得することは、その後の勢力拡大において大きな意義をもった。

以来、猪狩氏は60年間楢葉城などを拠点として楢葉郡内を治めていたが、天文3（1534）年に相馬氏の攻撃を受けた。それは、岩城重隆の娘久保姫の婚姻に端を発していた。伊達氏と岩城氏は久保姫を伊達植宗嫡男の晴宗へ嫁がせ、出生した息子を重隆の嫡子とすることを取り決めていた。この取り決めを仲介したのは、相馬氏である。相馬顕胤は伊達植宗の長女と結婚しており、晴宗は義兄弟にあたる。しかし、白河氏の取次役であった岩城氏家臣の白土与七郎は、その約束を破り白河氏との縁組を結んでしまった。そのため、重隆と白河氏は、伊達晴宗・蘆名盛氏・二階堂盛義・石川氏の連合軍に攻められることとなった。なかでも顕胤は、遺恨を晴らすべく、軍勢を率いて岩城方面を攻撃した。その結果、富岡城と楢葉城が落城し、広野・久之浜・四倉まで相馬氏によって攻略された。岩城氏側の葉王寺・恵日寺が仲介し、久保姫は四倉で相馬氏に引き渡され、晴宗に嫁いだ。和睦交渉の結果、楢葉・富岡は相馬氏に割譲された。それにより、猪狩氏は高倉山城（広野町）に本拠を移した。

岩城氏が楢葉郡を奪還した経緯はわかっていない。楢葉八幡宮を天文21（1552）年に再建した時の棟札に、岩城重隆が楢葉郡全域（木戸・富岡・川内・桶売）に「棟銭」（家屋に対する税金）を賦課していることが記されていることから、この時点ではすでに楢葉郡が岩城領に戻っていると考えられる。

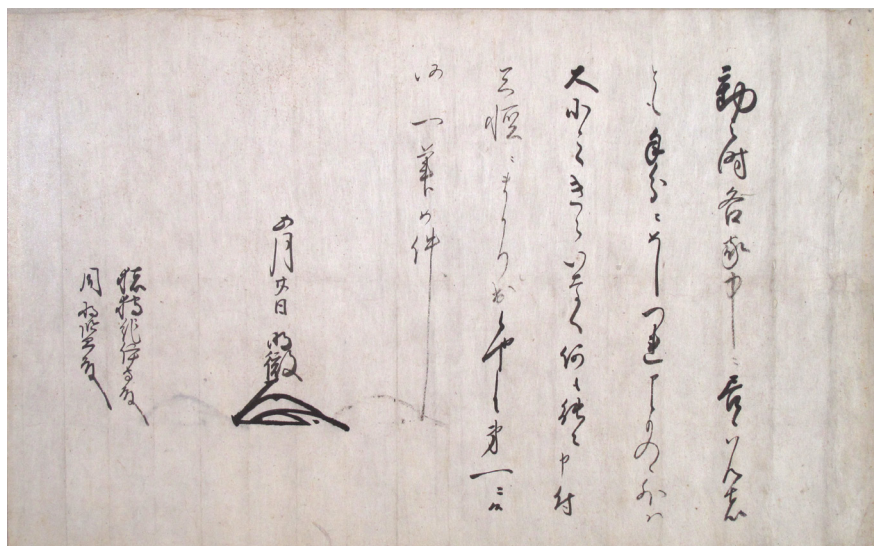


図3 岩城明徹（重隆）書状（個人蔵「猪狩家文書」）。写真提供：仙台市博物館。

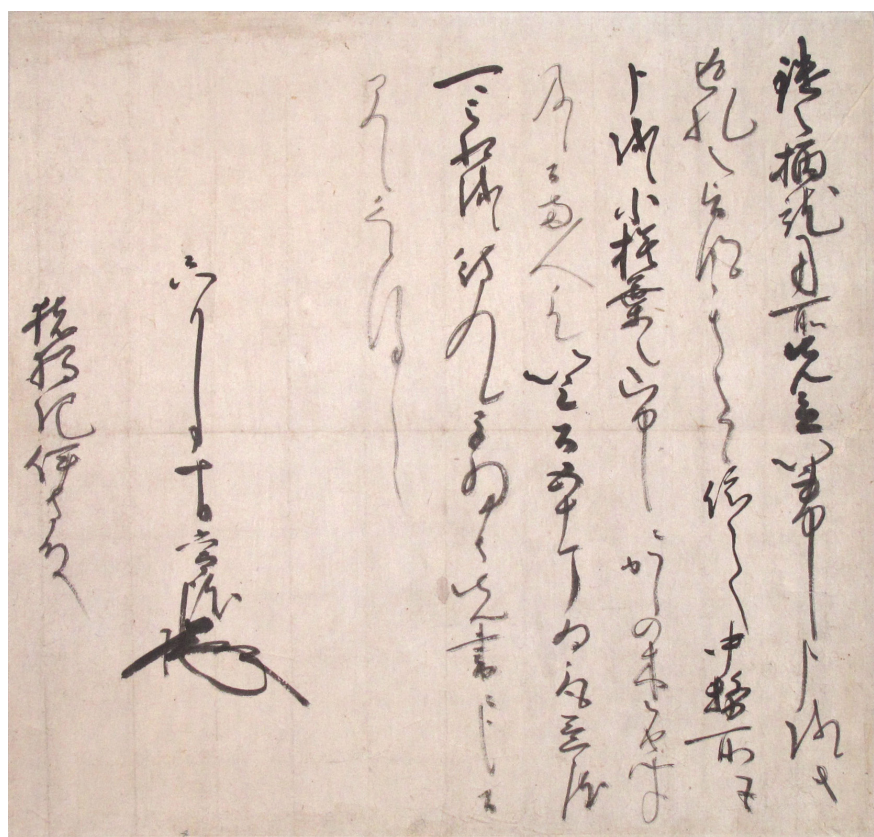


図4 岩城常隆書状（個人蔵「猪狩家文書」）。写真提供：仙台市博物館。

在地領主としての猪狩氏

猪狩氏は「地奉行」として楢葉郡を治めており、同郡全域に「棟銭」を賦課し、給人（大名から知行地を与えられた領主）である猪狩氏が徴収し、岩城氏へ納めていた。差出名から天文17（1548）年以降とわかる岩城明徹（重隆）書状（5月20日、猪狩将監・紀伊守宛）によれば、

大人・子供の区別なく軍事動員し、足軽役を務めるよう命じている。足軽は戦国時代には領国内で組織的に編成されるようになり、鉄砲による戦いの場では、歩兵として需要が高まっていた。平時は長男のみが岩城氏に奉公していたが、戦時下では次男以下や成人していない子供も動員された。また親類だけでなく在地の

Ouroboros

民衆も動員されたことがわかる（図3）。

天正10年代（1582-1591）とみられる岩城常隆書状（6月10日、猪狩守之宛）によれば、常隆は鑓の柄の材料を必要としており、小檜葉に「かし（樫）の木」があることが判明したため、守之中務（親満）兩人へ、350丁分の木材を確保するよう命じており、知行地内から武具の材料を提供していたことがわかる（図4）。このように、猪狩氏は、岩城氏が支配する檜葉郡の在地領主として税金徴収を担い、戦時下の武具調達や支配下の村の民衆動員の役割を果たしていた。

さて、天正17（1589）年、猪苗代に出陣した伊達政宗は摺上原合戦で大勝し、蘆名氏を滅ぼしたことで、伊達氏が南奥全域を統一した。しかしながら、翌天正18年、豊臣秀吉によって奥羽の諸領主に対し、「奥羽仕置」とよばれる処分や配置換えが断行され、奥羽が中央政権によって統一されていく。その後、岩城氏は関ヶ原合戦に参加しなかった

ため、慶長7（1602）年に所領を没収される。それに伴い、猪狩氏は秋田、仙台、会津など各地に離散した。

猪狩親之は伊達氏を頼り、亘理郡（宮城県）へ移った。親之の子孫は仙台藩士として幕末まで続いた。本展で展示している古文書は『仙台市史』編さんのための調査中に発見公表された。当該期の古文書が複数点まとまって発見されるのは稀有である。それに加え、戦国時代の檜葉の様子をよく示している点でも重要といえる。本展では戦国時代に檜葉郡を領知していた猪狩家に伝わる古文書および檜葉町内の城跡から発掘された考古資料を通して、知られざる在地領主猪狩氏の治めた檜葉地域の戦国時代のすがたを紹介する。また、動乱の戦国時代でありながらも、城館を中心に営まれていた檜葉の豊かな生活の様相もあわせて考えていきたい。

参考文献

泉田邦彦, 2022. 戦国期岩城氏の領域支配構造と「洞」. 福島史学研究, (100): 23-41.

泉田邦彦, 2023. 「岩城親隆」. 「岩城常隆」. 遠藤ゆり子・竹井英文編, 戦国武将列伝1, 東北. 408 pp. 戎光祥出版, 東京.

菅野正道, 2017. 資料紹介 仙台藩士猪狩家伝来の戦国・江戸初期文書. 仙台市博物館調査研究報告, (37): 34-47.

黒田風花, 2023. 第9講 戦国期南奥羽の領主たち. 東北大学日本史研究室編. 東北史講義【古代・中世編】. 272 pp. 筑摩書房, 東京.

遠藤ゆり子編, 2015. 東北の中世史4 伊達氏と戦国争乱. 293 pp. 吉川弘文館, 東京.

高橋 充編, 2016. 東北の中世史5 東北近世の胎動. 244 pp. 吉川弘文館, 東京.



（本館特任助教／日本史学・博物資源学）

檜葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」開館一周年記念 令和六年度特別企画展 戦国時代の檜葉

会 期：2024年7月20日（土）—11月30日（土）

前期7/20-9/29、後期10/1-11/30

史料保存のため、前期と後期で展示物の入れ替えを行います。

主 催：檜葉町教育委員会、東京大学総合研究博物館

開館時間：午前9時から午後4時30分（入館は午後4時まで）

休館日：月曜日、国民の祝日

観覧料：無料

所在地：福島県双葉郡檜葉町大字北田字鐘突堂5番地の4 檜葉町コミュニティセンター1階

アクセス：JR常磐線「竜田」駅下車徒歩20分 常磐自動車道「ならはスマートIC」より約5分

お問い合わせ：檜葉町生涯まなび課 0240-25-2492

事業支援：公益財団法人 福島イノベーション・コースト構想推進機構

【大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業】

【関連イベント】

8月24日（土）13：30～15：00 記念講演会

「戦国時代の檜葉郡と岩城氏・猪狩氏」 泉田邦彦氏（石巻市博物館）

10月27日（日）13：30～15：00 東大教室@檜葉

「古文書の教室：猪狩家文書にみる戦国時代の檜葉」 白石 愛（本館特任助教）

研究紹介

沖ノ鳥島のサンゴとサンゴ礁

茅根 創

博物館正面のサンゴ礁岩塊

博物館の来館者は、入口アプローチの鉄の塊と岩の塊、2つの屋外展示に出迎えられる。(図1)。左の鉄の塊は「伝アインシュタイン・エレベーター」の昇降装置である。アインシュタインが乗ったと伝えられ、旧理学部1号館建て替えの際に博物館に寄贈・保存され、昇降装置がここに、籠はIMTに展示されている(実際は乗っていないことが分かり「伝」とつけられた)。

一方、右は「沖ノ鳥島サンゴ礁岩塊」である。1.5 m×1 m、高さ0.5mほどで、重さは1トン以上になる。サンゴや石灰藻、貝からなる石灰岩で、私が指さしている先にはハナヤサイサンゴの骨格が残っている(図2, 3)。ほかにも、ミドリイシ、ノウサンゴ、トゲキクメイシの骨格をみることができる。こちらは真正正銘、日本の南の端、沖ノ鳥島から採取され、運ばれてきた。島の保全調査のために国土交通省京浜河川事務所が2007年に採取し、調査を行った後、博物館に寄贈された。



図1 博物館入り口に展示されている「伝・アインシュタインエレベーター」(左)と、沖ノ鳥島サンゴ礁岩塊(右)。

沖ノ鳥島

沖ノ鳥島は、東京の南方1740km、日本の最南端に位置する孤立した島である(図4)。東西4.5km、南北1.7kmのサンゴ礁(卓礁)からなる。低潮位のときには、サンゴ礁周囲の高まり(地形学の用語で礁嶺という)が干出する。内側は最大の水深が5 m程度の凹地(浅礁湖)で、

サンゴがつくった多くの高まり(パッチ礁)が分布している。

高潮位より高い(国連海洋法上の)島は、東小島と北小島のふたつで、どちらも護岸によって侵食から守られている(図5)。孤立した沖ノ鳥島は、周囲に40万平方kmもの排他的経済水域を持つため、国土保全の観点から国土交通省、



図2 沖ノ鳥島サンゴ礁岩塊。筆者が指さしているのが、ハナヤサイサンゴ群体骨格。



図3 沖ノ鳥島の生きているハナヤサイサンゴ群体。



図4 沖ノ鳥島の空中写真。国土交通省京浜河川事務所提供。左側の白波に沿って、手前が北小島、奥が東小島。

水産庁、東京都などが保全、港湾施設整備、サンゴ種苗生産などの事業を進めている。

サンゴ標本

博物館に入り、オープンラボの向かいには、沖ノ鳥島のサンゴ標本が展示されている（図6）。京浜河川事務所がサンゴ調査のために採取した標本で、調査後寄贈された。博物館には89点のサンゴ標本が保存され、展示されているのはそのうちの5点である。国土交通省、水産庁、東京都の調査成果をまとめ、沖ノ鳥島には25属93種のサンゴが分布していることが分かった（Kayanne et al., 2012）。沖ノ鳥島より高緯度の琉球列島には380種のサンゴが分布しているから、種の多様性は北西太平洋の熱帯のサンゴ礁としては小さい。沖ノ鳥島が孤立しているため、サンゴ幼生がここまで辿り着くのが難しいからである。

展示・保存されている標本は、こうしたサンゴのうち代表的なものである。標本の中には、骨格年輪解析のために採取された、径40cmほどのハマサンゴ群体もある（図7）。標本はすべて、博物

館地理資料部門のオンラインデータベース「現生・化石サンゴ標本データベース」（<https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DChiri/utcoraldb/page/database.html>）に、標本写真とともに公開した。

サンゴ礁コア

博物館には、沖ノ鳥島のサンゴ礁コア（柱状試料）も保存されている（図8）。京浜河川事務所が、島の保全調査のために沖ノ鳥島の東西断面に沿う3点で、掘削深10-20mのコア3本を採取した。このコアは、博物館に寄贈され、詳細な解析を行うことができた。

その結果、沖ノ鳥島の現在のサンゴ礁は、今から7千年前から4千年前までの後氷期の安定した海面に追いついて、厚さ9mでサンゴなどの造礁生物が積み重なって造ったことが明らかになった（Kayanne et al., 2012）。積み重なってサンゴ礁を造ったサンゴは、標本としても収集され、岩塊でも見られたハナヤサイサンゴやミドリイシである。

地形としてのサンゴ礁の上方成長速度は $9 \text{ m} / 3 \text{ 千年} = 3 \text{ m} / \text{千年} = 30 \text{ cm} / 100 \text{ 年}$ になる。今世紀の温暖化に

よる海面上昇が40cmから120cmと予想されている。海面上昇を最小に抑制することができれば、サンゴ礁は海面に追いついて天然の防波堤である礁嶺の地形を維持することができる。

データベース

岩塊、標本、コアなど「モノ」だけでなく、博物館地理資料部門には、沖ノ鳥島に関わる様々な文献資料も、収集・公開している。戦前の調査結果から、最近の保全事業に関わる報告書、論文など160点、地形図、海図、水路誌32点が、日本の最東端の遠隔離島である南鳥島に関わる資料とともにリストされている。著作権のない資料については、データベース（https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DChiri/okinotorishima_minamitorishima/index.php）から直接電子版を入手することができる。

データベースから、両島に関する科学論文が非常に少ないことが分かった。領有権について争いのある南シナ海の島々について、関係する国々が活発に研究を行い、論文として公表していることと大きな違いである。国土の科学的調査・研



図5 東小島。現在は、チタン製の防護工が設置されている。



図6 沖ノ鳥島のサンゴ標本。



図7 沖ノ鳥島ハマサンゴ群体。



図8 沖ノ鳥島サンゴ礁のコア（柱状試料）。

究と、研究成果の国際的な発信こそが、国土であることのもっとも重要な根拠ではないだろうか。

島の地生態工学的維持

沖ノ鳥島は、那覇からも小笠原からも、船で2泊3日の遠隔の孤島である。研究はほとんどなされていない。国の事業は、研究を目的としていないため、データが公表されることは少ない。我が国で唯一熱帯に位置する、フィリピン海プレート上の孤島の、生態学的、地球科学的にきわめて興味深いフィールドである。また、海面上昇に対して島を維持していくためには、島の形成と維持の生態学・地球科学・海岸工学的研究が必要である。

過去20年間、理学系研究科地球惑星

科学専攻／海洋アライアンス沖ノ鳥島・小島嶼国プログラムは、国や東京都、日本財団の事業に関わって研究を進める中で、ここまで紹介した貴重な試料を収集、研究する機会を得、博物館地理資料部門で保存することができた。解析結果をまとめて、今世紀の海面上昇に対して生態工学的な国土の維持を図ることを目指している。

さらに沖ノ鳥島の試料を、同部門が過去40年間にわたって収集してきた、琉球列島、太平洋小島嶼のサンゴ・サンゴ礁試料と比較することによって、太平洋のサンゴ礁の生物地理学的研究や、生態工学的国土維持策の同様に水没の危機にある環礁国への適用をはかることができる。

引用文献

Kayanne, H., Hongo, C., Okaji, K., Ide, Y., Hayashibara, T., Yamamoto, H., Mikami, N., Onodera, K., Ootsubo, T., Takano, H., Tonegawa, M. and Maruyama, S., 2012. Low species diversity of hermatypic corals on an isolated reef, Okinotorishima, in the northwestern Pacific. *Galaxea, Journal of Coral Reef Studies*, 14: 73-95. 10.3755/galaxea.14.73



(理学系研究科教授・本館地理資料部門主任／地球システム学・サンゴ礁学)

展示紹介

東京大学総合研究博物館本郷本館で常設展示している丸木舟の由来と年代

西秋良宏

2023年6月、本郷本館の常設展示に一艘の丸木舟が加わった。第一室、受付右手の壁際である（図1）。『先史時代以来、丸木舟は世界各地で広く利用されてきた。本標本は、1917年（大正6）、千葉県匝瑳市の「残シ沼」で発掘され本学に寄贈されたもの。材質はカヤ。製作年代は調査中。長さ約2.1mの櫓が伴っていた』という説明書きをつけて展示してきたが、公開から一年ほど経過し「年代」に関する情報も得られたから、改めて、この丸木舟についてわかっていることを記しておきたい。

本標本の発見経緯については、西村真次氏の「東部日本発掘の刳舟遺物」（『造船協會報』第23号、1918年）に詳しい。それによれば、干ばつが続いた1916年、「石田氏」が千葉県匝瑳郡岡岡町大字米倉に属する米倉開墾二六號地（現匝瑳市）の用水堀を修理していたところ地中から木製の櫓が見つかった、その下部にもさらに材木が埋もれていることがわかったが掘りきれなかった、日照りが続いて沼沢がさらに干上がった翌年、掘り進めたところ沼底から深さ八尺（約2.4m）の地点から丸木舟が見つかった。1917年8月21日のことであったと言う。

西村氏は数度にわたって所有者の石田氏を訪ね、この丸木舟また周囲の地形調査をおこなったと述べている。最初に見つかった櫓は家人が燃料のため燃やしてしまった、との記述は、時代を感じさせる。一方、残されていた丸木舟の形態や製法に関する記載は精緻である（図2）。全長十六眠三吋二分の一（約4.8m）などのサイズはもちろん、製作痕からみて

石器を用いたのではないかと、さらには舟の底部は丸木の皮を剥がしてあって火を用いて加工したのではないかなど興味深い観察結果をも残されている。

この丸木舟は長らく、「…2500年くらい前の丸木舟…東京大学出品 T5.S19」として、お台場にある船の科学館で常設展示されていた。T5というのは大正5年発見に由来している記号だろう。S19は、昭和19年に東京大学に寄

贈されたことを示すのかも知れない。東京大学と言っても当初の所蔵者は総合研究博物館ではなかった。船舶工学を扱っていた工学部（大学院工学系研究科）である。それが、2016年になって正式に総合研究博物館に管理換えされた。したがって、以後、総合研究博物館の出品標本として船の科学館で展示されてきたわけであるが、今般、同館の改修、改組にあたり返却されてきた、というのが今回

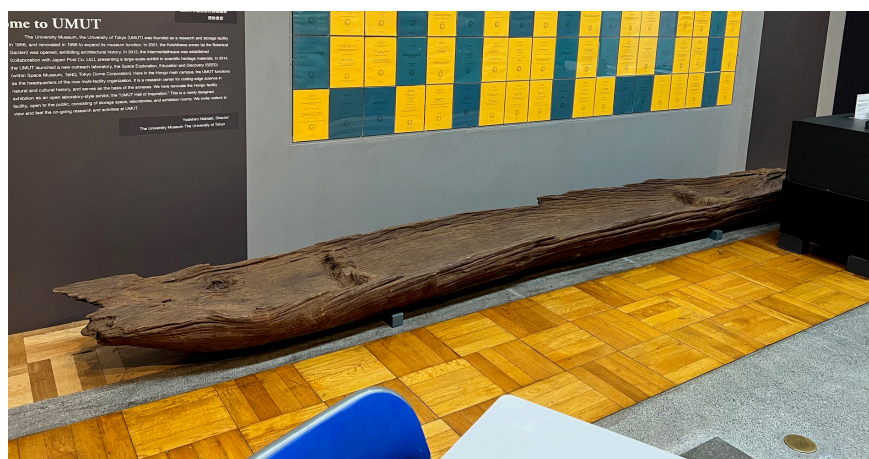


図1 本郷本館第一室の丸木舟。

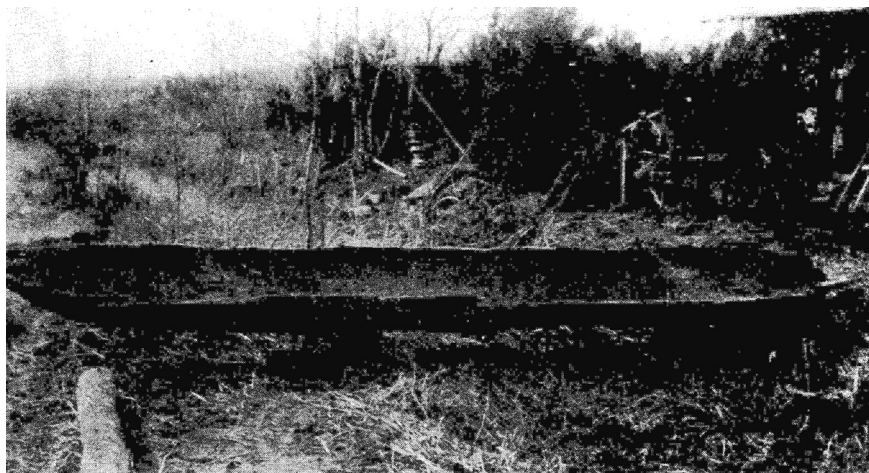


図2 発見当時の丸木舟（西村，1918）。

の本郷本館常設展示入りの経緯である。

さて、来館者の第一の関心は、この丸木舟はいつ頃のものですか、というものだろう。年代測定の手段がなかった大正時代、西村氏は海進や干潟の形成過程、周囲に縄文時代遺跡が分布していることをふまえ、約3000年前のものではないかと述べている。一方、船の科学館での展示説明には約2500年前と書かれていた。こうした具体的な数字が何にもとづいているのかはわかっていない。昨年、本郷に移設した際に、「年代は調査中」と書いた所以である。しかし、総合研究博物館は年代測定室をもつ研究施設であるから、いつまでも年代不詳のまま展示物を放置するわけにはいかない。

というわけで、放射性炭素年代測定を試みた。二つのサンプルを測定した。一つは、丸木舟内側底部の横桁内部をメスで切り取った木片である(図3)。もう一つは、船首の下に落ちていた木片である。後者は総合研究博物館ボランティアさんが見つけてくださった。設置直後であったから(2023年6月19日)、その際に落下したものと思われる。こうした出所不明のサンプルはふつう研究資料にはしないのだが、本体の切り取りを低減することも考慮し参考のため測定してみ

ることにした。

結果は、メスで切り取った横桁木片が3019 $\pm$ 21 BP (TKA-28727)、舳先の落下木片が3060 $\pm$ 21 BP (TKA-28726)であった。現在、一般に用いられている暦年較正プログラムによれば(OxCAL 4.2; IntCal20)、どちらもほぼ同年代で、約3200-3300年前と推定された。

ただし、この丸木舟が厳密にこの年代に「製作」されたのかを判断するのはたいへん難しいということも述べておく。まず、放射性炭素年代が示すのはこの木材が切り倒された年に近いと思われるが、それが舟の製作年代と同じであるとは限らない。長いことおいておかれた古木が素材だったかもしれないからである。また、樹木には年輪があって、そのどの部位を測定したのかによって同じ木材でも数十年やそれ以上、年代が異なる。細かく言えば他にも多くの考察を重ねねばならない。

したがって、なお「年代は調査中」というのが正しいのだけれど、現時点で来館者にたずねられたら、約3200-3300年前の縄文時代という年代測定結果がでていますが、専門家はもっと細かく調べたがっています、とお答えするのがいいだろう。

この丸木舟が東京大学所蔵の標本で、かつ千葉で見つかったものと聞いた際、真っ先に頭に浮かんだのは検見川の標本群である。第2次大戦後間もなくの千葉では燃料調達のため沼沢で泥炭掘削がさかんにおこなわれており、その際に多くの丸木舟が見つかったという。現在の東京大学検見川総合運動場、後に落合遺跡と呼ばれる地点で見つかった丸木舟は、最も著名な標本の一つである。なぜなら、いわゆる「大賀ハス」、すなわち、本学出身の大賀一郎博士が、同じ地点の下層で掘り出されたハスの実を農学的に開花させた際、その年代推定に使われたからである。今では一般的となった放射性炭素年代測定法が開発されて間もない頃、シカゴ大学のW.F.リビー博士によって3075 $\pm$ 180BP (C-688; *Science* 119: 140, 1954) との結果が得られた。二つのサンプルを混ぜて求めた平均年代だというが、それが「大賀ハス」の古代性についての信憑性を高めたと言われる。

要は、本稿で述べたとおり、本郷本館で展示中の丸木舟標本は検見川標本とは全く別物だったことがわかったわけである。だが、それにしても年代がよく似ている点が興味深い。重ねて言えば、測定の手段が全くない一世紀年以上前に示された西村真次氏の推定年代とも大きく変わらない。3000年ないしその少し前と言えば、現代の考古学編年で言えば縄文時代後期から晩期へと移り変わる頃にあたる。その頃の房総地方とはどんな時代だったのだろうか。地球規模での気候変動にともなう海進と海退や沼沢の形成と消長、そして、それらへの人々の適応、さらには、大正時代に太古の時代と言えいつ頃がイメージされていたのか等々、さまざまな疑問がわく。この丸木舟に関心をもった研究者に謎解きしてもらえればありがたい。



(館長・教授／考古学)



図3 年代測定用サンプルの採取箇所。

新規収蔵

未知の蛾を求めて

岸田泰則

僕は、昭和24年11月1日に東京都世田谷区で生まれた。幼少の頃から虫好きだったようで、夏になるといつも網を持って昆虫採集をしていた。小学生高学年の時だったと思うが、自宅前の電灯に大きな蛾がとまっているのを見つけた。電柱をよじ登り採ってみたら、クスサンだった。当時、クスサンは子供用の図鑑にも載っており、すぐに名がわかった。巨大な目状紋がある紋様、恰好いい蛾だった。クスサンをみて感動したのが、僕と蛾の付き合いの原点になる。

中学生になると、図書館には原色日本蛾類図鑑（保育社）があり、それをみて蛾の種類の多さに興味を持った。蛾類図鑑の持ち出しは禁止だったが先生に頼み、何回も借り出して自宅で読んでいた。でも、どうしても自分の手元に持っておきたいと思い両親に頼んで購入してもらった（当時の中学生の小遣い程度では到底買えるものではなかった）。同年代の親戚連中から、こんな高い蛾の本を買って何になるとさんざん言われたが、図鑑の知識を頭に入れることができ、多くの蛾の名前や分布などがわかるようになった。そのころ、丁度日本鱗翅学会主催の「ヒマラヤ昆虫展」がデパートで開催されており、それを見学に行った際に日本鱗翅学会に入会させて頂いた。

高校に入学すると、すぐに生物部に入部した。生物部の先輩には優秀な虫屋が数名いて、それらの先輩に連れられて高尾山での夜間採集を経験した。高尾山のケーブルカー駅から電源を借り、白幕の前に蛍光灯をぶら下げて、一晩中、そこに飛来する蛾を採るのだ。それ以後、何十回もケーブルカー駅で夜間採集を行ったが、それが、僕の蛾の研究の原点になっ

たことは間違いない。生物部の夏季合宿は北アルプスだったので、登山の経験も積むことができ、3年生には北海道奥尻島への遠征調査も経験した。

大学では蛾の研究がしたかったので、思い通りに東京農業大学に進学し、昆虫研究室に入ることができた。大学1年次（1968年）は奄美大島への長期採集に行った。東京から鹿児島まで急行列車で、鹿児島から船で奄美大島へ渡った。学生には、飛行機に乗るお金の余裕などなかった時代であった。奄美に着いてすぐ、ハブに噛まれた時のためにハブ研究所に血清を借りに行った。血清と太い注射器を渡されたのだが、こんなものは使用できないと思った。ハブの恐怖におびえながら夜間、蛾を採集したが、奄美の蛾はほとんど未知であったので成果は大きかった。奄美大島から鹿児島に戻ったが、そこで東京に帰らず、別の船に乗り換え、屋久島に渡った。安房から小杉谷までのトロッコ道を、キスリングを背負って歩いたことが懐かしい。屋久島から鹿児島に戻り、高千穂峰を登山した後、帰京した。3年次（1970年）は、台湾へ採集旅行。東京から沖縄島まで船で約2日間、沖縄島で採集（沖縄返還前で、ドルを使用した）。沖縄島から宮古島、石垣島を経由して台湾の基隆に着いたのは、東京を出発してから1週間後だった。烏来、阿里山、懇丁公園、霧社などで採集をし、再び船で沖縄島にもどり、そこから鹿児島に行き、列車で東京に帰った。阿里山で、ゼフィルス（乱舞）に遭遇したり、懇丁公園でキシタアゲハを採集したりするなど、忘れられない採集旅行となった。4年次（1971年）は、北海道、そして学生最後の採集旅行はマレー

シアに行った。当時の大学は学園紛争の真っ盛りで、僕は虫ばかり採っており、勉強した思い出はほとんどない（教員免許を取得しているので、まったく勉強しなかったわけではない）。

大学を卒業した僕は教員の道を進んだ。当時の学校の教員は、春、夏、冬と休みが多く、長期の昆虫採集旅行ができると思ったからだ。案の定、それを利用して海外（インドネシア、インド、中国、台湾など）へ採集旅行に行けた。蛾の採集、研究を続けていると、どうしても自分で新種を発見したい、自分で新種の名前を付けたいと思うようになった。日本の蛾は、先達のテリトリーでそこに入ることはなかなかできなかった。僕は台湾の蛾をメインに研究することにした。台湾の蛾は、戦後、ほとんど記録がなく、また手ごろな図鑑などもなかった。自分で図鑑を作成しようと考えたが、当時、台湾の蛾を出版してくれるところはなかった。そこで、僕は、月刊むしに「台湾蛾類図説」を連載した。1977年から1982年まで、ほぼ毎月に出し、40回までいった。もちろん、浅学だったので、誤りなど多々あったが、その40回分を合本したものは、台湾採集時に携帯して調べるのに便利だった。白黒の図だったが役立つのだ。その間に幸いにも台湾の蛾の新種記載などもできた。

順風満帆で怖い物知らずという感で生活を送っていたが、1982年に恐ろしい経験することになる。高山の蛾にも興味があり、僕は早稲田高山蛾研究グループに弟子入りをし、南アルプス北岳の調査に同行させて頂いた。芦安村（現・南アルプス市）の広河原から登山し始め、白根御池で1泊、そして北岳の野営指定地でテントは張っていたが、8月1日の夜からものすごい暴風雨となった。携帯ラジオで台風10号が近づいてくるのは知っていたが、穏やかな日が続いていたので、こんなに早く来るとは思わなかった。テントは立てていられず、なんとか北岳山荘に非難した。鉄骨でできた山荘

は揺れ動き、厚い網入りガラスにはヒビが入った。あまりの風雨に恐怖を感じた。台風が通過した翌朝に下山をしたが、雨は止んでいても強風が吹き荒れ、這いつくばっての行脚だった。やっとの思いで広河原に戻ったが、橋は濁流で壊されていた。駐車場にとめていた僕の車は、土石流に埋もれ、屋根しかみえない状態だった。購入した新車の埋もれた姿を見た時は、その場に座りこみ立っていらなかった。なんとか、車検証だけスコップで掘り出すことができた。南アルプススーパー林道は各所で崩壊し、通行できる状態ではないという情報が入った。広河原に停滞するつもりでいたが、災害救助法が発令され、自衛隊のヘリコプターで救助されることになった。ヘリには荷物を持って乗れないということで、寝袋の入ったザックは置いてきたが、採集した蛾は、下着の腹の部分に入れ、なんとか持ち帰ることができた。ヘリが甲府に到着した時は、安堵感でいっぱいだった。同行した神保一義、柳田慶浩、中島秀雄の諸先輩には、いろいろ援助して頂き、お世話になった。今でも感謝している。

このことがあってから僕は高山蛾の調査から遠ざかり、東南アジアの蛾にのめり込んでいくことになった。いわゆるバブル時代、東南アジア諸国から沢山の標本が日本にもたらされた。その中で、僕が一番興味を持ったのが昼蛾といわれる昼飛性の蛾の仲間だ。特にトラガとマダラガは、ライバルの同好者も多く、コレクション充実のための熾烈な戦いが続い

た。トラガは2001年までに22の新種・新亜種、マダラガは1999年までに23の新種・新亜種を記載（共著もある）できたし、1999年には遠藤俊次氏と共著で「昼蛾」の本も出版できた。バブル時代が終焉を迎えたように、2000年になると昼蛾ブームも終わってしまった。

2002年に森下和彦氏より、中国広東省広州にある華南農業大学大学の王 敏教授を紹介され、日本蛾類学会有志と華南農業大学との南嶺山脈の蛾の共同研究がスタートした。南嶺は蛾の未調査地域であり、たくさん新種・新亜種が発見され、多くの研究成果をあげることができた。この成果のまとめは、2冊の本「王 敏・岸田泰則編（2011）南嶺国家級自然保護区 蛾類と、王 敏・岸田泰則・枝恵太郎編（2018）南嶺国家級自然保護区 蛾類Suppl.」として出版できた。10年以上かけた調査が実になって嬉しい限りだ。

2008年頃、出版社の学研と新しい日本の蛾類図鑑を作ろうという話が持ち上がった（編集者の里中正紀氏の尽力が大きかった）。日本産蛾類大図鑑（1982、講談社）の発行から35年位経っており、新しい日本の蛾の図鑑が待望されていたのだ。僕は、仕事と図鑑作成の共存は難しいと考え、職場（学校）を定年前早期退職して、蛾の図鑑作成に全力を注ぐことにした。その甲斐があって、2011年に岸田泰則編 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ、Ⅱを発行できた。多くの著者をまとめるのは大変であったが、1つのことをやり遂げた充実感があった。図鑑を作成して

しまったら一段落とはいかず、以前から興味を持っていたヒトリガの研究に本腰を入れ、2015年に「世界的美麗ヒトリガ」という本を出版できた。また、中国各地に遠征をし、ボルネオ（図1）やラオスの熱帯雨林の採集も経験できた。

コロナ禍になり、国内外の遠征もままならず、自粛で家にこもることが多くなり、体力の衰えを感じる昨今であるが、まだまだ論文、報文を書き続けている。現在まで記載した新属・新亜属は21、新種・新亜種は352種（ボクトウガ科2、イラガ科2、マダラガ科24、リボンマダラガ科1、マダガ科3、スカシバガ科2、アゲハモドキガ科2、スズメガ科6、ヤマユガ科6、カイコガ科6、カレハガ科13、オビガ科3、ドクガ科33、シャチホコガ科63、ヒトリガ科（コケガ亜科）64、ヒトリガ科（ヒトリガ亜科）52、ヤガ科（トラガ亜科）31、ヤガ科34、コブガ科6）となっている。2015年以降に記載したホロタイプの多くは、東京大学総合研究博物館に寄贈（図2）してあるし、パラタイプ（数が多すぎて何個体あるか不明）やリファレンス標本を含む岸田コレクションも徐々に総合研究博物館へと寄贈している。それらは後から続く研究者の役に立てられれば嬉しく思う。まだ自宅には研究中のものも含めて標本が残っているが、もう少し遊ばせて頂けると幸いである。



（本館研究事業協力者・日本蛾類学会
前会長／昆虫分類学）



図1 ポルネオオオヤマユガ *Archaeoattacus staudingeri* を手に持つ著者（2015年4月、ボルネオ・サバ州）。

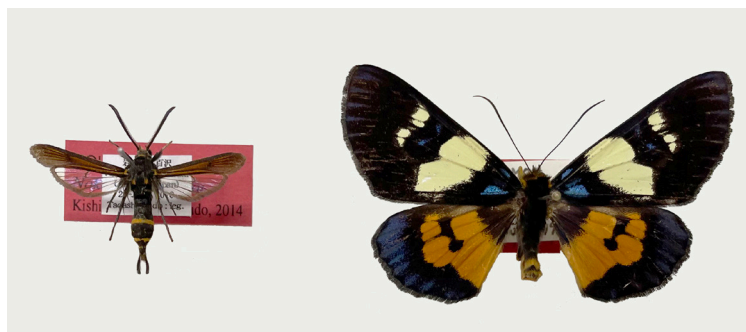


図2 著者により新種記載された蛾のホロタイプ標本（東京大学総合研究博物館所蔵）。左：ミチノクスカシバ *Nokona michinoku* Kishida, T. Kudo & S. Kudo, 2014, 右：*Exsula speciosa* Kishida, 2017.

案内

本館展示

特別展示『都市－アーケオロジー』

会期：2024年5月31日（金）～8月30日（金）

休館日：土曜・日曜・祝日

開館時間：10：00～17：00（入場は16：30まで）

会場：本郷本館展示場

主催：東京大学総合研究博物館

共催：文部科学省科学研究費助成事業
学術変革領域研究（A）「中国文明起源
解明の新・考古学イニシアティブ」

協力：浙江省文物考古研究所、鳥取大学
医学部

常設展示『UMUTオープンラボ ― 太陽系から人類へ』

会期：2021年11月11日（木）～

休館日：土曜・日曜・祝日

開館時間：10：00～17：00（入場は16：30まで）

会場：本郷本館展示場

IMT展示

特別展示『海の人類史－バイオニアたちの100万年』

会期：2024年7月5日（金）～10月6日（日）

会場：GREY CUBE（フォーラム）

主催：東京大学総合研究博物館

特別公開『神々の食物との出会い』

会期：2024年4月17日（水）～

会場：COLONNADE2（ギャラリー2）

主催：東京大学総合研究博物館

特別公開『モース日本陶器抄－東京大学コレクションから』

会期：2023年11月21日（火）～

会場：MODULE（モジュール）

主催：東京大学総合研究博物館

常設展示『Made in UMUT－東京大学

コレクション』

会期：2023年6月27日（火）～

会場：COLONNADE 2 COLONNADE 3

主催：東京大学総合研究博物館

常設展示『ギメ・ルーム－驚異の小部屋』

会期：2015年10月02日（金）～

会場：FIRST SIGHT

主催：東京大学総合研究博物館

スクール・モバイルミュージアム

『動物観』

会期：2024年5月10日（金）～2024年9月30日（月）

開館時間：9：00～17：00

休館日：日曜日・祝日

会場：文京区教育センター2階「大学連携事業室」

主催：東京大学総合研究博物館

共催：文京区教育センター

問い合わせ先：03-5800-2591（文京区教育センター）

檜葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム

『大地のまちのタイムライン』

会期：2023年4月22日（土）～

開館時間：9：00～16：30

休館日：月曜日・祝日・年末年始

会場：檜葉町コミュニティセンター1階

問い合わせ先：0240-25-4701（檜葉町コミュニティセンター）

学校対象教育実験プログラム

インターネットメディアテックでは、学校対象教育実験プログラム「アカデミック・アドベンチャー」の募集を行っています。学校行事や授業で当館を訪れる小・中学生を対象に、大学生ボランティアが「インターネットメディアイト」（媒介者）として一緒に展示物を観察・鑑賞し、自由に対話する体験を通じて、子どもたちが自らの好奇心を拡張、探求心を深めることのできる創造的な学術探検の機会を提供いたします。

利用日時：水曜日の9時半から12時までの間の約1時間（実施日は応相談、プログラム開始は一般向け開館時間前となります）

利用内容：大学生ボランティアが務める「インターネットメディアイト」の案内による対話式展示観覧

募集対象：小・中学校の学校団体（国公立・私立は問いません）

利用人数：1団体あたり児童・生徒数4名から60名程度まで

入館料・参加費：無料

申込期限：利用希望日の30日前まで

申込みおよび問い合わせ連絡先：050-5541-8600（ハローダイヤル）

ニュース

本館展示

本館では、以下の展示を公開いたしました。

・2023年9月30日（土）～2024年5月16日（木）特別展示『骨が語る「生と死」 日本列島一万年の記録より』

IMT展示

インターネットメディアテックでは、以下の展示を公開いたしました。

・2024年3月6日（木）～6月2日（日）特別展示『都市－エドギリエズ』

スクール・モバイルミュージアム

文京区教育センターにて、2023年10月24日（水）～2024年3月30日（土）に『バイオミネラル』を公開いたしました。

サウンドスケープ・モバイルミュージアム

東京タワーにて、2024年5月10日（金）～7月15日（月）に東京大学×東京タワーコラボレーション企画『都市－サウンドスケープ』を公開いたしました。

IMTイベント

インターメディアテクでは、以下のイベントを開催いたしました。

- ・2024年3月29日（金）駐日エクアドル大使館土器寄贈記念式典・講演会
関連イベント『海の人類史 - パイオニアたちの100万年』
- ・2024年7月7日（日）映画上映会『スギメ』
- ・2024年7月15日（月）講演会『海の人類史 原始×現代』

小石川分館イベント

小石川分館では、館外イベント『AnnEX Lab.ソトラボ』として、以下が開催されました。

- ・第11回『小石川植物園大温室のシンボルツリー』
日時：2024年4月4日（木）17:00～17:30
講師：川北 篤（東京大学大学院理学系研究科附属植物園園長・教授／植物生態学）
- ・第12回『蘭の博物誌を展示したい』
日時：2024年5月10日（金）17:00～17:30
講師：寺田鮎美（本館特任准教授／文化政策・博物館論）

アカデミックアドベンチャー

インターメディアテクにてアカデミック・アドベンチャーを開催し、以下の学校・団体にご参加いただきました。

- ・2024年2月2日（金）西東京市立青嵐中学校2年生 44名
- ・2024年3月13日（水）学習院中等科中学2－3年生 7名
- ・2024年3月27日（水）浦和明の星女子中学・高等学校中学1－3年 44名
- ・2024年6月5日（水）名古屋市立萩山中学校3年生 34名

出版

- ・フォト・ロジック フォトグラファー 田中良知 × インターメディアテク
編者：関岡裕之・田中良知
発行：東京大学総合研究博物館（2024年3月1日）

・『東京大学総合研究博物館所蔵 魚類標本リスト（3）』東京大学総合研究博物館標本資料報告第132号

著者：和田英敏・小枝圭太・上島 励
発行：東京大学総合研究博物館（2024年2月29日）

・『東京大学総合研究博物館所蔵 大沼克彦博士による打製石器復元製作コレクション』東京大学総合研究博物館標本資料報告第133号

著者：西秋良宏・三國博子
発行：東京大学総合研究博物館（2024年3月12日）

・被覆のアナロジー - 組む衣服／編む建築

編者・監修者：関岡裕之
発行：東京大学総合研究博物館（2024年4月1日）

・大地とまちのタイムライン ドキュメントブック：稲葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアムができるまで
編者：大地とまちのタイムライン ドキュメントブック編集委員会

発行：東京大学出版会（2024年4月22日）

・海の人類史 - パイオニアたちの100万年
編者：海部陽介
発行：東京大学総合研究博物館（2024年7月1日）

本館来館者

事前に申し込みのあった主な本館来館者は以下のとおりです（2024年2月1日～6月30日、敬称略）。

令和クラブ、燕市立燕北中学校、Compass International、Space and Rocketry Academy UAE、一般財団法人日本国際協力センター、浙江大学交流プログラム、大宮医師会立大宮准看護学校、鹿児島玉龍中学校、足立区立谷中中学校、中国アジア経済発展協会、岡山県立高校、株式会社Overfocus、Bin's Group、エデュパーク、有限会社関根塾、熊谷学園史跡めぐりクラブ、中国文化財返還運動を進める会、日本大学法学部上村ゼミナール、大阪高令者大OB会、新発田市立佐々木中学校、鳥取大学附属中学校、横浜市立横浜サイエン

スフロンティア高校、静岡市立高等学校、清須市立西枇杷島中学校、神奈川県立横浜立野高等学校、東京大学秩父演習林サポーターしおじの会、福井市足羽中学校、坂井市立春江中学校、豊川大和中学、名古屋市立若水中学校、名古屋市立天白中学校、全北科学教育庁、岡山高等学校、静岡県立韭山高等学校、法政大学犬塚元ゼミ、日本大学公共政策ゼミナール、大宮開成高等学校、都立殿ヶ谷戸庭園ガイド会

ボランティアのご協力

本館では、2024年2月1日から6月30日の間、下記22名の方々にボランティアとしてご協力いただきました。

飯干ユミ、金子清敏、金子清子、神田理子、越 章夫、佐藤れい子、添田禮子、竹下勝人、竹内輝子、成岡須美子、兵頭 勝、洲上妙子、船窪英子、古川真由美、保木本利明、星 佳子、細野 剛、水谷浪子、宮崎眞一、柳清 勉、山田節子、柚木陽子（敬称略）

インターメディアテクでは、2024年2月1日から2024年6月30日の間、下記25名の方々にIMTボランティアとしてご協力いただきました。

伊藤萬結、尹 杰、大島万凜、川並仁美、木戸さくら、木村菜結、金 美玲、古藤 南、小島初花、近藤真鈴、鈴木旭、袴田光平、立山華乃、中村ゆかり、長谷川智也、藤井まなめ、本藤美月、三平侑里奈、村上七海、森 綾乃、谷地美翔子、山崎智世、芳野晴臣、李 牧、渡辺隼也（敬称略）

東京大学コレクション未来基金

本基金は、当館が所蔵する400万点以上の貴重な学術標本資料群「東京大学コレクション」を、維持・発展させるために設立いたしました。立ち上げからまだ一年余りですが、多大なご支援をいただき、心より感謝申し上げます。基金の趣旨や活動報告は下記ウェブサイトに掲載してございます。何とぞ、引き続き、温かいご支援をお願い申し上げます。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt146>

博物館教職員

2024年3月31日付けで三木健裕特任助教、和田英敏特任助教、清水晶子技術補佐員、三國博子技術補佐員、小郷智子技術補佐員、宮島史子事務補佐員が退職しました。同年4月1日付けで町田倫子技術補佐員が着任しました。同年4月30日付けで金銀眞学術専門職員が退職しました。同年6月1日付けでWANG YUAN特任研究員が着任しました。事務部では、2024年4月1日付けで新井千恵子副課長が教育・学生支援部へ異動、柴田晴香係長が薬学部・薬学系研究科へ異動、大橋公一郎副課長が教育・学生支援部から当館に、田中茂穂主査が医科学研究所から当館に、荒浪航洋一般職員が教育・学生支援部から当館に着任しました。また、奥村奈津紀事務補佐員、尾野田純衣事務補佐員が着任しました。

現在の博物館のスタッフは以下のとおりです。

館長

西秋 良宏

研究部

キュラトリアル・ワーク研究系

教 授 遠藤 秀紀

(比較形態学、遺体科学)

教 授 海部 陽介

(人類進化学・形態人類学)

准教授 池田 博 (植物分類学)

准教授 佐々木 猛智

(動物分類学、古生物学)

講 師 矢後 勝也

(昆虫自然史学、保全生物学)

博物資源開発研究系

教 授 西秋 良宏 (先史考古学)

教 授 三河内 岳

(惑星物質科学、鉱物学)

博物情報メディア研究系

准教授 森 洋久 (情報工学)

助 教 金崎 由布子

(アンデス考古学)

放射性炭素年代測定室

教 授 米田 穰

(年代学、先史人類学)

特任研究員 尾寄 大真

(年代学、宇宙・地球化学)

特任研究員 大森 貴之

(年代学、分析化学)

タンデム加速器分析室

教 授 松崎 浩之

(加速器質量分析、同位体地球化学)

技術専門職員 土屋 陽子

(加速器質量分析試料調整、分析化学)

技術専門職員 徳山 裕憲

(加速器技術、加速器質量分析)

特任研究員 宮田 佳樹

(考古科学、文化財科学)

小石川分館

担当教員・助教 金崎 由布子

(アンデス考古学)

ミュージアムテクノロジー寄付研究部門

担当教員・教授 西秋 良宏

(先史考古学)

特任教授 松本 文夫 (建築学)

客員教授 洪 恒夫 (展示デザイン)

特任助教 白石 愛 (博物資源学)

インターメディアテク寄付研究部門

IMT館長・教授 西秋 良宏

(先史考古学)

特任准教授 関岡 裕之

(博物館デザイン)

特任准教授 松原 始 (動物行動学)

特任准教授 寺田 鮎美

(文化政策、博物館論)

特任助教 菊池 敏正 (文化財保存学)

特任研究員 中坪 啓人 (動物学)

特任研究員 上野 恵理子

(建築、美術解剖学)

顧問 (名誉教授) 西野 嘉章

(博物館工学、美術史学)

国際デザイン学寄付研究部門

准教授・特任准教授 (兼務) 森 洋久

(情報工学)

特任研究員 大澤 啓

(美学、美術史学)

特招研究員

秋篠宮文仁 (生き物文化誌学)

大場 秀章 (植物分類学)

諏訪 元 (自然人類学、古人類学)

田賀井 篤平 (鉱物学)

林 良博 (国際動物学)

吉田 邦夫 (年代学、考古科学)

* スタッフは2024年6月現在で掲載

Ouroboros 第80号

東京大学総合研究博物館ニュース

発行日：2024年7月25日

編集人：矢後勝也・金崎由布子・佐々木猛智・海部陽介

発行人：西秋 良宏

発行所：東京大学総合研究博物館

住所：東京都文京区本郷7丁目3-1

郵便番号：113-0033

電話：050-5541-8600 (ハローダイヤル)

F a x : 03-5841-8451

E-mail: web-master@um.u-tokyo.ac.jp

Designed by Ken Sakamura

Printed in Japan

ISSN 1342-3614

本号の内容は本館ホームページ (<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>)
でもご覧になれます。多くの写真はカラーです。